

金の海陵王

— 支那古今人物評傳(六) —

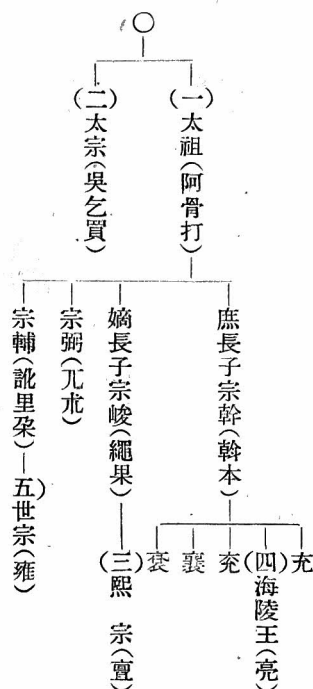
外 山 軍 治

—

遼金諸帝の事蹟は、東洋史を專攻する人々にもあまり知られてゐない。しかしまあ、その中では、金の海陵王はまだしも名の賣れた方である。「提兵百萬西湖上、立馬吳山第一峰」の句はかなり人口に膾炙してゐる。それから、海陵王の好色のことは誰もが相當くはしく知つてゐて、また興味をもつてゐるらしい。京本通俗小説の金鵝海陵王荒淫のくだりは、たいていの人がひそかに繕いてゐるのであらう。私が支那古今人物評傳に海陵王を書くんだ、といふと、私の友人たちはひとしくニヤ／＼と笑ふのである。しかしこの一篇、

その期待に副ひ得るやいなや。實は本篇は、海陵荒淫のことは詳しく知つてゐても、その他のことは餘り知らないといふ人々を對象としようと思ふからである。

金の海陵王——正しくは、即位前にはその名で呼び、即位後は金帝亮とよび、死後は海陵庶人と呼ぶべきであるが、便宜上其區別をせず通稱に従つて海陵王と呼ぶ——は金朝第四代の帝王である。在位は十二年に及んだが、第三代の熙宗（諱は亶、女眞名は合剌）を弑してその位を奪ひ、第五代の世宗（諱は雍、女眞名は烏祿）によつて位を廢せられた異常な經歷を有する帝王である。そしてこの三人の天子はいづれも太祖阿骨打の孫、お互に從兄弟の間柄であつたのである。



海陵王は太祖の庶長子宗幹(幹本)の第二子として太祖の天輔六年(一一二二)に生れた。宗幹は太祖の長子であるが、その母裴滿氏(光懿皇后)が次室であるために庶長子としての地位におかれ、元妃唐括氏(聖穆皇后)の腹に生れた熙宗の父にあたる宗峻(繩果)が嫡長として取扱はれたのである。

さて海陵王の生母は大氏といつて父宗幹(幹本)の次室である。正室の徒單氏には子がなかつたが、次室の李氏に長男の充が生れ、海陵王は次男であつた。なほ彼の下に充、襄、褒の三人の弟があつた。この大氏は、その大といふ姓からみて、女真人ではない。渤海人であつたと考へられる。この渤海人は、いふまでもな

く唐から五代の世にかけて二百二十餘年の間東滿洲の地に榮えたかの渤海國の遺民にほかならない。渤海國は粟末靺鞨を主とした靺鞨族をその主要構成分子とし、治者階級には高句麗人が少からず入つてゐたと考へられるが、唐の文化を攝取することにより、宛然支那的國家となつた。

渤海國が契丹のために滅されたのは、契丹の天顯元年(九二六)である。契丹はその故地に東丹國において渤海の遺民を統治したが、同三年に至り、その統御の困難なるを慮つて渤海の治者階級をいまの遼陽に遷し、かくて遼陽は渤海人の都と化した。遼陽の渤海人は二百年近くも遼陽に在つて契丹の統治をうけた後、金國の支配下に入つたが、金室では國初彼等の人心を收攬せんがために、その豪族の子女を宗室諸王の妃とした。世宗の母李氏が遼陽の渤海人豪族の女であつたことはさきに考證した通りであるが(「金世宗即位事情の一考察」(紀元二千六百年記念史學論文集)海陵王の母である大氏もおそらくその一人であつたであらう。支那的な教養のうちに育てられた渤海人

を母にもつたといふことが、海陵王の漢文化に對する態度に影響するところ少くはなかつたと考へる。

二

第三代熙宗の皇統二年（一一四二）、金は淮水、大散關を結ぶ一線を以てはじめて宋との國境線を劃し、宋より銀二十五萬兩、絹二十五萬匹の歲貢を得、金帝は宋帝を臣事せしめることゝなつた。さきに半島の高麗と西方の西夏とに夫々臣禮をとらせてゐるので、こゝに於て金帝は四海に君臨するといふ名の上での優越を得た。太祖阿骨打がその本據會寧府（今のハルビン東南阿城縣下白城）に於て即位してから僅かに二十七年である。右の如き大飛躍は、一に太祖阿骨打を中心とした宗室諸王の努力によつてなしとげられた。外にあつて交戦と占領地の經營に従ふものと内にあつて國家機構の整備を行ふものとの別はあるが、宗室諸王の協力のたまものである。彼等は猛安、謀克を世襲し、その主なものは、金國の最高政治機關を構成する勃極烈に任ぜられたり、軍令軍政の最高權を掌握する都元帥府の諸官に任ぜられたのであるが、壓へのきくそして

人望のある太祖が崩じて、これに比べると見劣りのする弟の太宗吳乞買が位に即くと、これらの宗室諸王の封建的な勢力は次第に大きなものとなつてきた。そして太宗の子にあたる諸王は時を得顔に濶歩して、太祖の子にあたる諸王の反感を買ひ、内地派の諸王と外地派諸王との勢力争も表面にあらはれてきて、金室を中心として宗室諸王が一致協力するといふ美風は失はれた。この間に在つて始終京師會寧府にとゞまつて、政治機構の完成に盡力し、宗室の勢力を制御して金室の中央集權の確立に一生を捧げたのは太祖の庶長子、即ち海陵王の父の宗幹であつた。

年を逐うて膨脹してゆく領土と住民とを統治すべき政治機構の改革、整備といふ事業は、宗幹に課せられた重大な任務である。そしてその方針は彼によつてちやんと定められた。それは漢文化をどし／＼とり入れて、それを政治の上に活かしてゆくといふことにほかならない。多數の漢人を治下に入れた新しい情勢に對處するには、これは不可避の勢であるとせられた。かくて太宗の天會四年（一一二六）には國初女眞の舊制を活かして作つた金國の最高政治機關である勃極烈の制

度——數人の勃極烈より組織せられてゐて、それには宗室の有力者が任ぜられてゐた——のほかに、支那的官制である尙書省以下の諸司府寺を設け、また支那的な禮制を定め、漢人の統治にあたらせた。

さらに、宗幹は太宗の長子宗磐（蒲盧虎）といふ有力な候補者を抑へて、宗室の猛將宗翰（粘罕）とともに、太祖の嫡長宗峻（繩果）のわすれがため、少年の合刺（後の熙宗）を太宗の儲君である諸班勃極烈に立てることに成功したが、太宗が崩じて熙宗が位に即くと、天會十三年、これを機會に勃極烈を全然廢止して、中書門下・尙書の三省を設け、これを總理する宰相として領三省事において、金の國政のすべてを管掌せしめることにした。こゝに於て金國は官制の上で漢化を示したのである。これには、從來の女真君長と勃極烈との關係を、金國皇帝と宰相以下諸官との關係におきかへることに、官制の上に於て君主權を確立しようといふ意圖もあつたのである。そして彼は、甥にあたる新天子熙宗をば、中原國家の天子にしあげるべく教育した。金國皇帝の尊嚴を保つためには、宗室諸王のもちあはさない、そして多數の漢人を統御してゆくのに

も都合のよい支那的な教養を身につけさせることが最も効果的であるといふことを知つてゐたのである。

かくて、一般に保守的な宗室の間に動搖がおこつた。熙宗に反抗的な態度をとるものも出る。宗幹は機會を失はず、太宗の嫡長子で儲君になれなかつた宗磐以下熙宗の帝位を脅すおそれのある太宗の諸子や、外征諸元帥を次々に除去することができた。彼の望んだ中央集權はやうやく確立せんとした皇統元年（一一四一）宋との戰爭最中に宗幹は死んだ。媾和成立を見なかつたのである。

上に述べたやうな宗幹の事業は、彼が遼の降臣や、宋から金に使して來た文臣など、士大夫の意見を徴し、その參畫によつてこれを遂行したものである。されば宗幹は漢文化輸入のさきがけであり、もとより漢文化に對する理解も深く、當時に於て最も進歩的な人物であつたと思はれる。かういふ人を父とし、そして漢文化のうちに育てられた渤海人を母にもつたといふ環境は、海陵王の幼い頭腦に漢文化に對する憧憬の念を種えつけさせずにはおかなかつた。事實、父宗幹は、張用直といふ漢人を門下に招いて海陵王とその兄の充の

師傅としたのである（金史卷一〇五、
張用直傳）。

少年海陵王だけがさういふ教育を施されたのではない。當時金の京師會寧府に於ける宗室をはじめ女眞貴族のうち、新人に屬する人々の家庭ではみなさうであつた。それは彼等が漢文化に眩惑せられたといふ理由からだけではない。やはり將來金國の首腦者たるにはまさにかくあらねばならぬと考へたからでもある。後年海陵王の漢文化心酔に反して大に女眞精神の作興を鼓吹した世宗なども、やはり從兄の熙宗や海陵王と同様に漢文化のうちに育てられた人である。そして彼の母も海陵王の母と同様に遼陽の渤海人李氏の女であつたのである。

三

さてこの邊でそろ／＼海陵王を一人前の男として登場させよう。父宗幹を失つた皇統元年には彼はもはや二十歳の多感な青年になつてゐて、河南遠征中の都元帥宗弼（兀朮）の幕下に在つた。宗弼もやはり太祖の皇子の一人で、海陵王の父宗幹の異母弟にあたる。少年時代から漢文化の美點を教へこまれたであらう海陵王

が、河南、ことに北宋の都であつた開封の地に在つて、如何ばかりその華かさに心を惹かれたことであらう。

宋との和が成つて、北滿の首都上京會寧府へ歸つた海陵王は、皇統四年、二十三歳の時に中京（大定府）留守に任せられ、今の熱河省寧城縣下、老哈の流れに臨んだ大名城に赴任した。遼代から五京の一として榮えた由緒ある土地である。こゝで中央から離れて三年在任したのであるが、この間にそろ／＼彼の叛骨があらはれ始めた。

海陵王の父宗幹の努力によつて太宗諸子を始め金帝の尊嚴を犯さうとする宗室諸王は多く除去せられ、熙宗の君主權はやうやく確立せんとしたのであるが、宗幹といふ大黒柱がなくなると若様ぞだちの熙宗には、宗室制御といふやうな難事業は貫徹さるべくもない。

太宗諸子のうちで残つてゐる人々をまた王に封じて優遇するといふやうな、宗幹の方針に逆行するやうなことが起つた。宗幹の歿後、宗室諸王中で最も地位の高いのは、太師・領三省事・都元帥の宗弼であるが、彼は元來が武將であつて、内治には全く無經驗であるから結局にらみがきかなかつた。

そして熙宗には世繼がなかつた。あつたことはあつたがなくなつたのである。宋と和を結んだ皇統二年、熙宗は皇后裴滿氏との間に一子濟安を儲け、これを中原國家の例に従つて、皇太子に冊立した。金に於ける皇太子の制はこれに始まる。蝶よ花よと可愛がつたかひもなく、この子は生後十ヶ月で薨じた。熙宗と皇后とのかなしみは非常なものであつた。臣下は後宮を選んで繼嗣をつくるべきことをすゝめたが、裴滿皇后がまたしつかりしてゐて、なか／＼自由にさせてくれない。熙宗たるもの甚だ面白くない。先年から大酒をする癖ができてゐたが、愛兒は失ふし、後宮に於ても思ふやうにできない、そのうさはらしに、また飲酒にふける、酔へば酒亂となつて宗室、大臣であらうとも容赦なく咎うつたり手討にしたりする。もちろん萬機を總攬するなど思ひもよらぬ。皇后はまた女丈夫の一面を發揮して忌憚なく政治にも干渉し、氣に入りのものはどん／＼ととりたて、一切をきりまはす。かくて金室は亂脈の極に達した。

海陵王はこれに目をつけて、ひそかに帝位をねらふに至つたのである。熙宗は太祖の孫であるが、自分も

また太祖の孫であることにはかりはない。まして父宗幹は太祖の長子である。むしろ自分の方が帝位につくべき資格をそなへてゐる筈だ、と彼は考へた。かうした場合、父宗幹が庶子であることなどは重く考へないのが人情の常である。中央の監督の眼が充分にとどかないのを幸に、彼はまづ黨派をつくり始めた。こゝにまた天一坊に於ける山内伊賀亮といふほどでもないが猛安の蕭裕といふ男が出て来て大にこれを煽動した。これはその姓の示す如く女真人ではなくて奚人である。奚といふのは庫莫奚の略で、北魏時代から今の熱河省を本據として遊牧し、契丹とは佳地が近かつたばかりか人種の上でも極めて親近な關係にあつたが、契丹が勃興するとその征伐をうけてこれに降つた。遼國內では常に、殆ど契丹人とかはならない社會的待遇をうけ、金代に入つてからも契丹人と行動を共にした。蕭裕は猛安を授けられてゐるところよりみて中京附近に相當の勢力をもつてゐたのであらう。いづれにしても被征服民にちがひないから、猛安は授けられても金の政治に反感をいだきやすい。伊賀亮になるにはもつてこの境遇にある。この男が大に煽動して、犬馬の勞はい

とはない、といふので海陵王は大に喜び、これと弑逆の謀をこらすこととなる。

中京留守の任に在ること三年、皇統七年五月に上京へ召しかへされ、同判大宗正事となつた、海陵王は更に十一月には尙書右丞に任ぜられ、はじめて中央政府に重要な地位を占めるに至つた。時に二十六歳。彼は早速蕭裕を拔擢して兵部侍郎に任じて他日にそなへた。

一日、熙宗に謁見を仰せつけられた海陵王、たま／＼太祖創業の艱難の話が出ると、嗚咽流涕した。熙宗はその忠なるに感じ、大にお覺えがめでたくなつたといふ。苦勞しらずの熙宗をまるめこむには造作はなかつた。

熙宗の信任を得た彼は、翌八年六月に平章政事に任ぜられたかと思ふと、半年たつたかたゝない十二月には右丞相にすゝみ、更に翌九年正月朔には叔父の宗弼が歿して空席になつてゐた都元帥をも兼ねた。これは金の軍令、軍政の最高權を掌る役目であつた。

ところがこの頃、皇后裴滿氏との關係を熙宗に疑はれるといふ困つた事件が起つた。海陵王の誕生日に熙宗は小底の大興國を遣して禮物を賜つたが、この時皇

后もまた別に禮物をことづけたのがいけなかつた。熙宗と皇后との仲がうまくいつてゐない時である。熙宗は不快に思ひ、大興國を杖つこと百、そしてその上賜物を取りかへした。何かと臣下に手落があると手討ちにあふのだから、海陵王が大に懼れたのは無理がない。しかし、幸に、何のお咎めもなく、間もなく左丞相に任ぜられ、更に三月には太保、領三省事にのぼつてゐる。こゝに於て彼は勢望ある家柄の子弟を引ばつて大にその驕心を得ることにとめてゐる。地盤かために熱中してゐると、次の様な事件があつてこゝに波瀾がまき起された。

四月壬申(二十一日)夜、大風雨電雷あり、被害甚大、金室でも寢殿の鴟尾を震壞した。火が上寢に入り幄帷を燒き、帝は別殿にのがれてこれを避けたといふ様なひどいものであつた。熙宗は歴代の天子がよくやる様に罪己詔の起草を命じた。起草の任にあたつた漢臣は、思ひきり貶損した方がよいと考へて一文を草した。ところができ上つた文章があんまり、己を罪しすぎてゐる。これは漢人が文字に託して主上をのゝしつたものである、と中傷するものがあつたので、熙宗はかゝつ

となつて、たちどころに起草者を慘殺した。そしてこの男に起草を命じたのが海陵王であるといふことがわかると、熙宗は大に機嫌を悪くし、遂に海陵王を汴京（開封）の行臺尙書省事へ轉出させた。これは明かに左遷である。

心に深く期する所があつた海陵王は、上京を去つて任地汴京へ赴く途中、中京を通過したが、當時すでに中京留守事に任ぜられてこの地をつた蕭裕と會つて自分は河南の兵を率ゐて位號を建立し、まづ兩河（河北、山西）を定めて兵を擧げるから、諸猛安と結びこれに呼應して起つべきことを約せしめたといふ。豈はからんや、野心満々として良郷まで行くと召還命令に接した。召還の眞意が測りかねるので大に懼れて歸つたところ、行臺尙書省事よりもまだ下のさきに一度任ぜられたことのある平章政事に任ぜられたので、なほ一層不平でもあり、また薄氣味悪く感ぜざるを得なかつた。

さて彼が上京へ歸つてきた頃、彼よりもさきに、平章政事秉德が、尙書左丞唐括辯、大理卿烏帶等とともに廢立を謀つてゐた。秉德は宗室の猛將で太祖太宗朝

の功臣であつた、かの宗翰（粘罕）の孫に當るが、機密を洩したといふ事件があつて熙宗に杖たれた。それを深く怨んで不軌を企てるに至つたのである。唐括辯は熙宗の女、代國公主をめとつてゐる駙馬都尉、烏帶も宗室の子である。兩者ともに熙宗の亂行に懼れをいだいた揚句、秉德の謀に加つたのであらうが、女婿にまで背き去られたのは熙宗の運の盡きである。

この事を海陵王の耳に入れたのは烏帶であつた。願つてもないことゝ、海陵王は喜んでこれに加つた。さて、秉德等は熙宗を廢することばかり熱心に考へてゐたが、彼等自ら位を奪はうといふのでもなく、又その後は何人を推戴しようといふ確かな目あてはつけてゐなかつた。或日、海陵王は辯に、大事を行へば誰を立つべきかと問うた。辯は熙宗の弟の胙王常勝か、鄧王の子阿懶くらゐのものだと答へた。海陵王は阿懶は屬疎であるからいけないといつた。海陵王の氣持を察した辯が、「公、あに意あらんや」ときくと、「もしやむを得ずんばわれをすてゝそれ誰ぞや」と本心をもらした。こゝに於て朝夕、集つて密議をこらすに至つた。彼等が何事か密議をこらしてゐることを皇后に告げる

者があり、皇后から熙宗の耳にも入つたので、熙宗は駙馬の唐括辯を呼びつけてこれを叱責し杖つたので、これが又密議に拍車をかけさせることゝなつた。

海陵王は唐括辯との問答により、胙王常勝と阿懶とが人望のあることを知つたので、これを殺害しなければならぬと考へた。胙王常勝は熙宗の弟である。飲めない酒を熙宗に強ひられ、これを辭つたので不興を蒙つてゐる。阿懶は海陵王の父宗幹などの弟にあたる宗傑の子の鄧王奭の子、太祖の曾孫であるから、海陵王が屬疎といつたのである。

たゞ河南の軍士孫進といふものが皇弟按察大王と自稱した。皇弟といふ二字が熙宗の氣に障り調べさせたが證據があがらぬ。これに乗じて海陵王がけしかけたので、遂に熙宗は肉親の弟胙王常勝及びその弟查剌を殺した。海陵王はさらに熙宗にすゝめて阿懶及びその子撐懶までも殺害させることに成功した。邪魔ものは除かれた。熙宗は常勝を殺すと、その家産を阿懶に與へたのであるが、阿懶を殺すと、こんどはこれを海陵王に與へた。すねにきずもつ海陵王、不安にならざるを得ない。

この前後から熙宗の亂行はますますひどく、十一月五日には權力をふるつてゐた皇后裴滿氏を殺し、その代りにさきに殺した胙王常勝の妃撒卯を宮中に入れ、これを皇后に冊立することにきめてゐた。十五日には、邪魔を除くためか、德妃烏古論氏、夾谷氏、張氏を、十二月八日には妃裴滿氏を殺したので、群臣は震恐し、不安の氣は金室内に漲つた。海陵王はこの機を見遁すものではなかつた。

十二月九日、唐括辯の夫人である代國公主は、その母裴滿皇后のために佛事を營むといふので邸にゐなかつた。これ幸と、海陵王、秉德等は、夜辯の邸に會した。その夜宿直にあたつてゐる宿衛十人長僕散忽土は海陵王の父宗幹に恩をうけた人物、護衛十人長徒單阿里出虎は宗幹の家と姻戚關係があり、現に海陵王はその娘を阿里出虎の子にめあはせてある。ともに海陵王の謀に加擔してゐることはいふまでもない。更に海陵王は早くから部下になつてゐた李老僧のはたらきで、寢殿のかぎを自由にしてゐる寢殿小底、權近侍局直長の大興國といふ男を手なづけてあつた。

手順はきまつた。夜二更、大興國は宮門をひらき、

詔であるといつて駙馬の唐括辯を召し入れた。海陵王、秉德、及び海陵王のむこの徒單貞、李老僧よりなる暗殺隊は、各々刀を懷中にし、辯に従つて入つた。門番も辯が駙馬であるから疑ひもしない。殿門のところまで來ると、さすが衛士は怪しいとみてとがめようとしたが、辯が白刃をつきつけたので動くものもない。そこへ僕散忽土、徒單阿里出虎もやつて來て寢室に忍びより、一時にどつと亂入した。熙宗は起き上り榻上の佩刀に手をかけようとしたが、ない。それは大興國によつておき場處がかへられてゐたのである。萬事休す、熙宗はつひに鮮血に、みれてたほれた。三十一歳である。

さて熙宗を弑した。しかし暗殺者すべてがすぐさま海陵王を推戴する氣配がない。秉德ははじめから海陵王推戴に氣のりでなかつたのである。氣ぬけの態で、一瞬妙な空氣がたゞよつた。するとすかさず、僕散忽土が、平章（海陵）を立てることに相談がきまつてゐながら、今となつて迷ふとはどうだ、といつて海陵王を坐に奉じたので、秉德等も皆羅拜して萬歲を稱し、こゝに海陵王は金國第四代の帝位に即いたのである。上

京城頭血なまぐさい冬の夜はやうやく明けんとしてゐた。想ふにこの弑逆事件、海陵王は秉德、辯等元來彼とは別派の不平分子を巧みに利用し、そしてまんまと帝位についた。それには彼自身の黨派、忽土、阿里出虎、貞、興國、老僧等の暗躍が如何に効果的であつたことを知らねばならぬ。海陵王、秉德等とは人物の大きさがちがつてゐた。

帝位に即いた海陵王は早速に行動を開始した。自分と善くない宗室重臣を除かねば、安んじて帝位に即くことはできない。まづ宗室中の長老、領三省事兼左副元帥宗敏、左丞相兼都元帥宗賢を殺さなければならぬ。彼は、さきに熙宗が皇后裴滿氏以下諸后妃を殺し、弟常勝の夫人を宮中に入れ、これを皇后に立てようとしてゐたことを利用し、主上が立后を議するのであるといつてこれを召し入れ殺害した。宗敏は宗幹の弟、海陵王には叔父にあたる。兇焰如何ともなし難く、後に世宗となる萬王烏祿もこの時宗敏召し出しの役目を命ぜられ、その殺されるのをまのあたり見せつけられても何ともしようがなかつたのである。

新帝は秉德を左丞相兼侍中に、辯を右丞相兼中書令

に、烏帶を平章政事に、忽土を左副點檢に、阿里出虎を右副點檢に、貞を左衛將軍に任じ、鞏國を廣寧尹に、老僧を同知廣寧府事に任じ、夫々莫大な褒美を與へた。宗室重臣を直ちにすべて斥けたかといふに然らず、太師・領三省事以下二十人の大官には夫々地位を進めたことは注目すべきである。十一日、大赦を行ひ、皇統九年を改めて天德元年とした。海陵時に二十七歳である。これから天德、貞元、正隆あはせて十二年の彼の治世が始まる。

四

さて即位後の海陵王の事蹟については、一々具體的に叙述する餘裕はない。彼はさきに、日頃からなれしとしんでゐた尙書省令史、渤海人の高懷貞に「われ志すこと三あり、國家の大事皆我より出づること一なり。師を帥ゐて國を伐ち、その君長を執へ、罪を前に問ふこと二なり。天下の絶色を得て、これを妻となすこと三なり」(金史卷一二 九高懷貞傳) とその理想を語つたといふ。彼はその在位十二年の間、その理想の實現に全力を傾倒したといひ得よう。

國家の大事皆我より出づ、といふのは獨裁君主權の確立を意味する。篡奪者である彼は、當面の問題として自己の地位を絶對安全なものとしなければならぬ。即位の當日、宗敏、宗賢を殺したけれども、彼の周圍には、まだ彼に對して好意をもつてゐない宗室が充滿してゐた。まづそれらの宗室を抑へる必要がある。想へば彼の父宗幹は宗室勢力の制壓に一生を捧げた人である。その努力によつて熙宗の獨裁君主權はやうやく確立せんとしたが、その死後は對宗室政策も不徹底となつたことはさきにも一言した。海陵王はその當時から宗室の勢力の恐るべきものであることを知り、熙宗の宗室に對するはつきりしない態度を齒搔ゆく思つてゐた。宗室は恐るべきものであるにちがひない。彼自身が宗室諸王の一人であるのだ。彼は父の遺策をうけついで宗室勢力の制壓に乗り出した。宗幹のゆき方はまづ制度をたて、これによつて宗室を制壓してゆくといふ漸進的なゆきかたを主としたが、海陵王はまたおそろしく急進的であつた。天德二年四月、謀叛のかどを以て、太師・領三省事宗本、判大宗正事宗美、東京留守宗鑑、北京留守下をはじめ、その他太宗の子孫

七十餘人、領行臺尙書省事秉德をはじめ、宗幹の子孫三十餘人、諸宗室五十餘人を殺害した。宗本、宗美、宗鑑は太宗の子、下は太宗の孫、ともに宗幹の太宗諸子に對する彈壓を免れ、後熙宗の優遇に與つてゐたものである。秉德は宗翰の孫、さきに海陵王と熙宗弑逆をなし遂げた人物であるが、元來海陵王推戴を考へてゐなかつたといふ様な關係で、海陵王はこれにくみ太祖、太宗朝の功臣宗翰の子孫の勢力を代表するものとしてこれを殺したのである。この時、これも叛逆の大立物尙書左丞相唐括辯が、宗本と通じて不軌をはかつたといふことで殺されたのは注目すべきである。惡事をもにせる、そして元來海陵王とは別派であつたこれらの人物を活してゐては大事の妨げ、といふのであらう。ことの序でにいふならば、さきに海陵王と不軌を企てた奚人蕭裕は、秉德、辯等の殺害にも與つて力があり、その後榮進して大に權力を得たが、海陵王の態度が冷酷となつたのを憂ひ、遂に他の契丹人達と謀叛を企て、殺されるに至つた。

海陵王の宗室殺害はさらに續いて行はれた。太祖の弟斜也の子孫にして殺害せられたものは百餘人に及ん

だといふ。大略重だつた宗室の手下が終ると、彼は弟の充を司徒兼都元帥領三省事に任じ、更に太尉に昇し文武の最高位にすゑた。これが名だけの存在であることはいふまでもない。

さて、夥しい數に上る太宗諸子及び宗翰、斜也等の子孫の殺害は、たゞ人を殺すといふことだけが目的ではない。彼等宗室諸王の有する封建的勢力を芟除することがその究極の目的であつた。封建的勢力を芟除するとは、彼等が世襲する猛安謀克をとりあげて、これを中央の手に掌握する、いはゞ兵馬財政の權を中央に收めることにほかならない。かくて宗室殺害によつて獨裁君主權はますます確立せられた。

宗室殺害のみが彼の目指す獨裁君主權確立の工作ではなかつた。いくら海陵王が性急でも人殺しばかりしてゐるわけにはゆかない。やはり父のやつた様に制度を改革することによつて漸進的にやつてゆくといふ方法もあはせて採用した。背後に實力のともなはぬ制度の改革は無意味であるが、彼の場合その懸念は微塵もない。

天德三年(一一五一)十一月、從來女眞の本據であつ

た東北滿洲の地に於て多くの謀克戸の集團を統べ、子孫相ついで威權を専らにしてゐた世襲萬戸の官を廢止し、それに代つて中央政府から節度使をおいた。これも封建的勢力の拂拭による中央集權の確立を目指したものにほかならない。そしてこの時、それまで功臣に完顔姓を賜つて恩遇を示すことが行はれてゐたが、すべて本の姓に復せしめてゐる。金室の尊嚴を犯させまいといふ用意でなくて何であらう。

また正隆二年（一一五七）二月には、親王以下の封爵規定を改定し、生存者は二品以上、死者は一品を參酌削除し、公私の文書に王爵の字あるものは、皆限を立てゝ、毀抹した。墳墓碑志といへども一切發いてこれを毀つといふ徹底ぶりである。後に世宗となる烏祿も趙王に封ぜられてゐたが鄭國公に降封せられた。これは宗室諸王と金帝とのへだたりを大きくすることによつて金帝を尊嚴無比なものとしようといふ意圖の下になされたものである。

官制の上に於ても、天德二年十二月、從來中原統治の機關として汴京（開封）に設置せられてゐた行臺尙書省——海陵がその長官である領行臺尙書事に任ぜられ

て任地に赴く途中で召還せられたことは前述の通りである——を廢止し、天會三年以來金の軍令軍政を掌る最高機關であつた都元帥府を樞密院と改めた。行臺尙書省の廢止は中央政府の權限の増大を意味する。都元帥府を樞密院と改めたのは、單に名だけの改變ではなく、從來現地派遣軍的な色彩を帯びることの多かつたものを、眞に中央政府に屬する機關に改めたのであつて、官制改革の妙味を發揮してゐる。そして樞密院の最初の長官には、都元帥であつた弟の充を任じたのである。又更に正隆元年正月には、中書、門下の二省を罷めて、尙書省のみによつて政治を行ひ、平章政事の官をやめる等、制度の單純化によつて獨裁權の確立をはかつたのである。

女眞的な封建勢力を有する宗室諸王の芟除は、女眞的なもの、舊きものすべての否定である。女眞的なもの、舊きものを棄てゝ支那的なもの、新しきものにとりいれてゆく、これは海陵王の父宗幹がかくあらねばならぬと定めた方針である。篡奪者である海陵王は一入女眞的なもの、舊いものはきらいである。そして支那的なもの、新しいものはぞつこん好きである。彼は父

の定めた方針に従つてばく進した。女眞的封建勢力を除いて、彼の望む君主獨裁權を確立する唯一の道であると考へた。

女眞的なもの、舊きものゝ否定、支那的なもの新しきものへの憧憬は、こゝに燕京今の北京への遷都といふ形をとつて現れた。首都上京會寧府は、金室興起のためたい土地柄であるが、淮水以北を包含した金國にとつてはその位置が北方に僻在し過ぎてゐた。その不便なことは熙宗もすでに痛感してゐた。しかし遷都を思ひ立つには至らなかつた。漢文化のうちに育てられた海陵王にとつては、北滿の女眞の舊都はうつとうしただけで何の魅力もないばかりか、この地には宗室の勢力が根をおろしてゐて、暗に彼の企圖する獨裁君主權の確立の妨げをする。そこで彼は遷都を斷行し、宗室諸王をその領有する猛安謀克とともに北滿の彼等の故地からひき離し、これを中原の各地に徙すことによつて、その積年の勢力を分散させてこれを弱める、これが自分の志す獨裁君主權の確立の最上の法である。それだけではない。彼は即位の前より南宋討滅といふ夢をみてゐる。その夢をみたすためにも、南遷はなさ

ねばならなかつた。

彼が北支那の新天地燕京に都を遷すことを發表したのは、即位の翌、天徳三年四月。その前月から遷の燕京城を廣め、宮室の建築を命じてゐる。そして翌四年二月、上京を出發し、途中嘗て留守として在任した中京に駐ること五ヶ月にて、翌天徳五年三月燕京に到着、遷都のことを中外に詔し、貞元と改元し、燕京を改めて中都となし、大興府と稱した。中都が首都となつた關係上、汴京(開封)を南京、中京(熱河大名城)を北京に改めた。田村實造氏「金の海陵王燕京遷都の一考察」(紀元二千六百年記念史學論文集)參照。

燕京の地を首都として選んだのは、その地が少しく東方には寄つてゐるが略々金國領土の中央に位し、遼の南京として榮え、すでに北支那屈指の都會であり、北は中京(熱河大名城)、東京(遼陽)、上京(ハルビン東南)を経て女眞の本據と連絡するに便であり、西は西京(大同)を経て西方と、南は南京(開封)を経て宋に通ずる孔道を有するといつた様に四通八達の要地であつたからであらう。十月には始祖以下十帝の梓宮も上京より迎へられ、燕京南方の房山に葬られた。宗室諸王の重なものもその猛安謀克とともに北支那にうつさ

れ、南進金國の國防を分擔した。さきに述べた現地側諸機關の統合はこの南進といふ新しい態勢を豫想してなされたものであつた。

女眞的なもの、舊きものの嫌惡は、正隆二年八月、上京をやめてたゞの會寧府におとし、十月には上京の舊宮殿、諸大族の邸宅、及び熙宗が皇太子の死を悼んで建てた儲慶寺などをすべて毀ち、その址をたひらにして耕作地となした一事によつても看取される。その政治も次第に女眞人を相手とせず、漢人に呼びかけてゆく、女眞の本據である滿洲の地をすて、中原の地を本地とするといふ傾向を生じてきた。彼の周圍には女眞舊族は影をひそめ、漢人や、漢文化の中に育つた契丹人や渤海人が多くなり、女眞人でも家柄のない新進少壯の徒のみがふえた。そして「國家の大事皆我に出づ」といふ第一の志は満たされていつたのである。

第三の志である、天下の絶色を得てこれを妻となす」といふのはどうであらうか。海陵王といへばすぐ海陵荒淫といふことが思ひ出される位の好色家。これがあるためにその名をひろく知られてゐるのである。ところが、それは天子になつてからであつて、それま

では大に身をつゝしみ妻妾も數人ではまんしてゐた。帝位に即くとそろ／＼鋭鋒をあらはし始め、次第に後宮も賑かになつていつた。次第にたゞの女では面白くなくなつたと見え、殺害した宗本の子莎魯唆、宗固の子胡里剌失打、秉徳の弟乂里の妻を宮中に納れたのを手始めに、これぞと思ふものは誰憚ることなくその愛慾の對象としようとした。濟南尹をしてゐた、後に世宗となる烏祿の夫人烏林荅氏もその二人で、海陵王は彼女を宮中に召し入れようとした。烏林荅氏は貞操を守らうと決意したが、濟南で死ねば夫に難儀がかかるので、召しに應じて燕京へ赴く途中、良郷ですきをみて自害した。かういふ哀話もある。金史の後妃傳は描寫が意外に寫實的で面白い。京本通俗小説の金瓶海陵王荒淫の面白さはよく知られてゐるが、金史の方は正史のことだからかたくりしいと思つて讀まないためか、あまりその面白さが知られてゐない。海陵荒淫は實はすでに面白い后妃傳を骨子として、それにもつと面白い部分をつけ足してゐるのである。どちらにしても一々讀んでゐたら頭腦が痛くなる位、澤山の後妃を對手にしほうだいにしてゐる。驚くべき精力家であつたと

見える。全く金史海陵本紀の贊に人の妻を慾すれば、則ちこれをしてその夫を殺さしむ……宗族を屠滅し、忠良を剪刈し、婦姑姉妹盡く嬪御に入る」といつてゐる通りである。彼が暴君として惡名を流した所以である。

しかし、海陵王は天下の絶色を得たであらうか。これはほんとうは海陵王にきいてみなければわからないことであるが、彼のことだから多分「我未だこれを得ず」と答へるであらう。女真人あり、契丹人あり、渤海人あり、比類なき漁色の末、彼は遂に金國內で得られる女には飽き足りなかつた様である。彼は宦官の梁琉が、「宋に劉貴妃といふ尤物がございます、姿質艶美、蜀の華藥、吳の西施もなか／＼どうして及びませぬ」といつたのを信じた。それを得たい。かくて海陵王は南宋征伐を一層熱心に考へるに至つたといふ。さてその南伐は彼の手に劉貴妃をもたらずであらうか。

五

「師を帥ゐて國を起ち、その君長を執へ、罪を前に問ふ」とは彼の第二の志であつた。國を伐つとは南宋

征伐を意味するものにほかならない。海陵王の南伐については、別に一文をまとめるつもりであるから極くあらましを述べることにする。南伐の準備に關する記載が金史に見えるのは、正隆四年（一一五九）のことで、熙宗の皇統二年宋との和が成立してから十八年目、燕京に遷都してから六年目にあたる。しかし彼がひそかに南伐を夢みたのは即位前のことであり、燕京遷都も實は彼の抱懷する南宋征伐の實現を一步進めたものと考へられる。海陵王が南伐を企てるに至つた動機は那邊に在つたか。さきに劉貴妃のことを書いたが、劉貴妃をとるといふ目的からだけではないのである。金は南宋、高麗、西夏に臣禮をとらしめてゐるとはいへ、それは名だけの優越で、經濟的にも文化的にも南宋にこれに依存しなければならぬ。宋との貿易によつて金國內に流入する茶、絹、銅、香料など南方産の物資は金人の生活にとつては不可欠のものとなつてをり、宋室より贈られる工藝美術品は、金室にとつてはこれまたなくてはならぬものとなつて來た。また、すでに漢文化に憧憬し、それがこよなく尊いものに考へられてゐた金人にとつては、漢文化の宗家として存在する

南宋は文化の源泉でもあつた。江南に踞踏してゐるとはいへ、現に江南の富強をほし、文化の傳統を誇つてゐる。この現實にあきたらず、名實ともに四海に君臨しようといふのが海陵王の理想であつた。

南宋征伐の後、高麗、西夏征伐をも考へてゐたのである。今や金國は女真人の國家から中原國家へ變型した。

あらゆる女眞的なものを否定して、支那的なものを取り入れよう、舊據をはなれ女真人を棄て、漢土、漢人を對象に政治を行ふやうになつた以上、南宋を討滅して天下に君臨したいのは無理からぬことである。事の成るか否かは別である。彼はこの點自國の力、自己の力をあまりに高く評價し過ぎてゐたといはねばならぬ。

正隆四年、南伐の準備ははじめられた。通州では兵船の建造が命ぜられ、兵器の製造は各地で行はれた。

諸道の民兵は徵集せられ、重税が課せられた。天下には不平の聲が漲り、盜賊は各地に蜂起した。しかしこれらを鎮定する位の實力は充分にもつてゐた。金廷に於ても責任を重ずるものはすべて南伐に反對した。興師の名のないこと、金の兵力の振はないこと、人民が負擔に堪へず上を怨むといふことなど、次々に諫めた。

しかしそれは海陵王を激怒させるだけの効果しかなくつた。諫めれば諫めるほど南伐に對する彼の熱意は燃えてきた。もはや彼は反省を忘れた人となつてゐた。

或者はこれを退け、或者はこれを殺して沈黙させた。

就中彼が非難せられるのは、彼の嫡母（父宗幹の正妻）徒單太后が南伐を諫めたといつてこれを殺害したことである。何しろ宗室諸王は既に多くは殺されてゐる。

骨のあるものは皆斥けられてゐる。彼の周圍には、たいてい思慮分別のない若少の徒か、海陵王の御機嫌をとつて出世しようといふ徒輩ばかりである。市井の無頼の徒で、傳奇小説をかたつたり、俳優諧謔の語を弄することを業としてゐた張仲軻、これは京本通俗小説では舌が尖つてゐて長い人物としてなか／＼大切な役割を演ずるが、この男はだん／＼海陵王にとりいつて名だけではあるが左諫議大夫、修起居注にまでとり立てられた。そして便辟側媚を以て寵愛せられ、右丞にまで昇進した李通、南宋の降臣で江南の道路をよく知つてゐるので任用せられた馬欽、これらとともに側近にあつてさかんに南伐の熱を煽つた。

南伐を斷行するとなると中都（燕京）ではすでに北に

かたよりすぎる。そこで彼は北宋の首都であつた南京（開封）にのり出すことにした。そして正隆六年四月、南京へ行幸することを宋側に通告し二月には中都を立ち七月南京に到着した。ところが、四月には、強制的徴兵を嫌つて今の蒙疆地方に於て契丹人が叛亂を起した。この報に接しても海陵王は南伐の計畫をすてず、これが鎮壓を命ずるとともに、あらゆる反對をおしきつて同年九月南京を發つて南伐の軍を起し、しきりに宋軍を撃破した。しかし背後の叛亂は燎原の火の如くにひろがり、討伐軍は相ついでやぶれた。彼は七月、さきに亡んだ遼室耶律氏の子孫、さきに金にとりこにしてあつた宋室趙氏の子孫合せて百三十餘人を殺し、八月には叛賊討伐に効果を擧げ得なかつた契丹人臣僚を殺し、更に北支や滿洲に残つてゐる宗室諸王のもとへ刺客を送つてこれを殺した。それは契丹叛賊に推戴せられたり、或は背後に於て反抗する恐れのある勢力をすべて刈りとつておかうといふのである。

この時、東京留守として遼陽にあつたのは海陵王の従弟、曹國王烏祿（後の世宗）である。滿洲各地を荒しまはつて遼陽攻略を企てた契丹叛賊の一軍を撃退して

人望をあつめてゐたが、彼のところへも海陵王の刺客派遣の報が傳はつた。彼は坐してその毒刃に斃れるか起つて自分の運命をぎりひらくかの土壇場におひこまれた。たま／＼南征の途中から逃歸した遼陽附近の渤海人の一隊や、遼東半島の曷速館女眞の一隊及び遼陽城内に勢力を有する渤海人豪族の支援を得、十月七日、勸進といふ形式で帝位に即き、大定と改元し、南征中の海陵王の罪惡を暴揚した。彼は海陵王の犠牲となつた夫人烏林答氏の仇を、今とつたのである。

海陵王が世宗即位の報をきいたのは十一月二日のこと、和州の陣中にあつた。彼は髀をうつて歎じて曰く、「われもと宋を滅して後大定と改元せんと欲す、豈天命に非ざらんや」と。直ちに北還しようとしたが、南征軍が動搖して宋軍に乗ぜられては事面倒、軍に長江渡河を強行せしめて歸望を斷ち、親兵を率ゐて急遽北歸するに若かず、といふ李通のすゝめに従ひ、揚州に馬をすゝめ、十一月二十六日、水軍を瓜州渡に會し、明日を期して江を渡らうとした。遂に味方を犠牲にしようとした海陵王。しかしそのまゝではすまなかつた。不得手な渡河戦を強ひられて困惑した金軍は、遼陽に

於ける世宗の即位を聞き、反戦気分がみなぎつた。ときに契丹人浙西路都統使耶律元宜といふ男が、衆とはかり、廿七日詰旦、同志とともに衆をひきゐて海陵王の陣營を襲つた。海陵王は宋兵の急襲なりと考へ、衣を攬つて起つたが、帳中に射こまれた矢をとつて見て愕然として曰く「わが兵なり」と、弓を手にとらんとして箭にあたつて地に仆れた。ところへ叛兵がとびこんで来てこれを斬つた。手足がなほ動いてゐたので遂にこれを縊殺した。かくて梟雄海陵王は四十歳を一期として揚州の陣中を血に染めてたほれたのである。南伐は完全に失敗した。提兵百萬西湖上、立馬吳山第一峰の句は空しく彼の雄圖を物語るのみに終つた。海陵王の望んだ宋の劉貴妃も遂に彼の手には入らなかつた。海陵王の志すところ、三つのうち二つは遂に満されなかつたといふよりも、結局彼の身をほろぼすことにもなつたのである。

六

遼陽に於て世宗を推戴したのは、海陵王の政治からふり落され、滿洲の地に見すてられた勢力である。従

つて保守的な、復古的な傾向をもつてゐる。よろしく祖宗興起の都である上京に還都すべしといふ意見が強かつたのはこれがためであつた。しかし世宗はそれを斥け、敢然として中都に進出して、人心を收攬せんとしたのである。海陵王落命の報はその途中に傳へられた。豫期しない出来事は急速に世宗の主權を確立せしめた。契丹叛賊の鎮定、南宋との國交調整といふ二大事業は新帝の手によつて處理せられた。そしてこゝに、名君としてたゞへられる世宗の政治が始まるのである。

海陵王に對しては、即位の翌大定二年降して海陵郡王に封じ、諡して煬といつた。その柩は南京(開封)の班荆館に安置してあつたのを、中都にうつし、房山の金室諸王の兆域中に葬つた。更に大定二十一年に至り、諸王の塋域内に葬つておくのはけがらしいといふので詔して王封を奪ひ、海陵庶人に降し、山陵の西南四十里にうつして改葬した。生前、宗室諸王の王封を奪ひ、墳墓碑志といへども一切發いてこれを毀つたことのある海陵王は、いまこゝに王封を失ひ、庶人の地位におとされたのである。

さて、今日海陵王は暴君の標本、世宗は名君の代表

の如くに考へるのが常識である。善惡の對照ははつきりしてゐる。これに對してはあまり異議を申し立てる人もなからう。しかしこゝに一寸辭つておかねばならぬのは、この評判のさだまる、そのもととはいへば、金史本紀の記載であつて、これ以外にはあまり材料はない。海陵本紀は海陵王の罪惡を露骨に書いてあり、その贊の如きはそれはじめに、「知は以て諫を拒ぐに足り、言は以て非を飾るに足る」といふ殷の紂王と同格の評語を頂戴し、以下その惡德をならべたて、最後に「天下後世をして無道の主を稱するに海陵を以て首となさしむ。戒しめざるべけんや、戒しめざるべけんや」といつてゐる。これを世宗本紀が彼の美德を書き立て、その贊はとびきり上等、優をとりこして秀、その他に名君はないやうに書いてゐるのに比べると、少々ひどいなあと思はざるを得ない。海陵本紀のものになつた海陵庶人實錄は、世宗の時代につくられたものであるが、それには海陵王のことを出来るだけ悪く書かした。悪く書けば書くほど、自分の立場がよくなる。后妃傳が面白いのもこの爲である。世宗の御前で海陵王のことを悪口いつて拔擢せられたものも多かつ

たといふ。これに反して世宗實錄は世宗の孫章宗時代に出来上つたものであるから、できるだけよく書くのは當然のことである。海陵王は記録の上で大敗した。それに讀者は多く支那の讀者人であるから、金といふ北族國家の立場にたつて見るといふことはない。中原を侵略しようとした海陵王は暴君で何十年もの平和を招來した世宗の方は名君となりやすい。その上、支那の讀書人は、積極的な活動をする天子よりも天下泰平を祈るむしろ保守的な帝王の方が好きであるからである。

かういふと、横事をおすやうに思はれるか知らないが、金國の立場に立つて見るときは、海陵王の政治を暴政としてけなしてしまふことはできない。獨裁君主權の確立を目的とする、宗室制壓、制度改革、そして又燕京遷都といふ大事業は、金國にとつてはそれがどういふ方法で、どういふ形をとらうとも、早晚なされねばならぬところであつた。孤疑逡巡することなく、これをやつてのけたのは、海陵王にして始めてできたことである。滿洲の本據を棄て、金國を女真人の國家から中原國家につくりかへるといふことも、これまた

避けることのできない勢であつた。但しその方法は過激のきらひなしとはしない。しかしこれは思ひきつたことをしようとするものには往々あることで、彼のみを責めるにあたらない。南伐の一舉は、これまた當時の金國皇帝としてはかく望むのは無理からぬことと思ふ。しかし、それはあくまで理想である。金の國力としてどうしても無理である。何人もが無理だといふのに、これを無理と考へないのが、海陵王らしい。或はあくなき漁色によつて頭腦に少々くるひが來てゐたのかも知れない。これは暴舉といはねばならない。漁色のことは賞めたことではないが、この私行上の惡業だけで彼の事業の全部を帳消にしてしまつてはかはいさうである。海陵王はやはり大局のわかる、一個の傑物であつたといはなければならぬ。

世宗の政治は、海陵王の政治の否定ではない。實はその潮の流れにのつて、海陵王のゆきすぎをもとへもどさうとしたものに過ぎない。そのよい處はそのまゝ頂戴して、わるい處だけを訂正したのである。そのまゝ頂戴した部分は、海陵王の實蹟として考へてやらねばならないと思ふ。



石佛だより

目下法要中です。さうたうなにぎはひです。店もあちこちにできました。たゞ一昨日の雨で少々涼しいです。各洞窟に坊さんを配し、香花のたゞよひ、鐘のひびき、ちよつと風情がかはりました。それにやつぱり大佛の膝の上にあがつて記念撮影をする人があるので、立札をしました。警備隊はなかなか親切に世話してくれます。いよいよあすからこゝのところで法要儀式あり、しばいもやります。

目下鹽田(義秋)君と八木(正治)さんと三人ぐらし、炊事は張良(雲岡在の百姓の息子)にてやゝ中等の教育あり、村第一等のインテリなり、毎年ボーイに使用す、漢高開國の功臣と同姓同名なり)です。けさは代用食小米粥をおいしくいただきました。みな元氣ですから御安心下さい云々。七月十日水野清一氏より日比野宛——括弧内の説明は編者にて附す——